FEC News 民間外交推進協会
The International Friendship Exchange Council
www.fec-ais.com

2025年9月号 vol.490

contents

理事長対談シリーズ▶サクラグローバルHD㈱会長 2 3
ルーマニア・フォーラム▶欧州研究会 5
大阪・関西万博パビリオン紹介 5 6 7

日越関係深化へ 民間外交の重要性を共有

ドー・バン・チエン・ベトナム共産党政治局員歓迎夕食会

民間外交推進協会（FEC）は7月28日、来日中のドー・バン・チエン・ベトナム共産党政治局員、書記局員、ベトナム祖国戦線中央委員会委員長の歓迎夕食会をホテルニューオータニ東京で開催した＝**写真**。夕食会には、ベトナム側からチエン政治局員のほか、ファム・クアン・ヒエウ駐日ベトナム大使、ファム・ヴァン・ラップ・ハイフォン市党委員会副書記等10人、FEC側からは渡部賢一FEC会長、松澤建FEC理事長等10人が出席した。

冒頭、松澤理事長が「ドー・バン・チエン閣下とお会いする機会を得ることができ、大変光栄である。本日はビジネスの話題だけでなく自由にご歓談いただきながら、友情を深める機会となれば幸いである。今回の来日が実り多いものであり、ベトナムと日本の関係が更に深化することを願っている」と開会挨拶を行った。

続いてチエン政治局員が「今回が初の訪日であり、温かい歓迎に感謝する。ヒエウ駐日大使よりFECのことを伺い、皆さまがベトナムとの交流を大事にされていることに感銘を受けた。民間外交は非常に重要な意味を持つ活動であり敬意を表したい。われわれのみならず、世界の多くの国のリーダーにとっても同じだろう。ベトナム祖国戦線中央委員会にとっても民間外交は密接な対外活動である。ベトナムには『はじめの一歩が大切。一歩を踏み出すことができれば困難があっても乗り越えられる』という意味のことわざがある。今回の交流を機に多くの協力ができることを楽しみにしている」と述べた。

その後、夕食をともに歓談し、最後に全員で記念撮影を行い終了した。

中立金利目指す日銀 物価への影響は限定的

FEC東京国際フォーラム 黒田東彦前日本銀行総裁

民間外交推進協会（FEC）は7月4日、黒田東彦政策研究大学院大学政策研究院シニア・フェロー（前日本銀行総裁）をお迎えして「日本経済の展望と金融政策の正常化」をテーマにFEC東京国際フォーラムを国際文化会館にて開催した＝**写真**。松澤理事長の開会挨拶の後、黒田氏が講演を行い、最後に質疑応答が行われた。

【講演要旨】

1998年から2012年にかけて、日本は約15年間のデフレ期にあった。この間の年平均物価上昇率は－0.2％と緩やかであったが、そのうち12年間はゼロもしくはマイナスの「しつこいデフレ」が続いた。この間の実質GDP成長率は年平均0.6％にとどまり、日本の中期的な潜在成長率（１％弱）を下回っていた。また、平均失業率は4.6％で、完全雇用とされる３％を上回り、雇用環境は厳しかった。

1990年代半ばから2000年代前半にかけての「就職氷河期」は、このデフレ期と重なる。当時、実質賃金は年平均0.9％低下し、失業率はそれほど高くなかったものの、賃金の低下という構造的問題があった。就職氷河期世代（現在の40～50代前半）はその後も所得水準が上がらず、消費水準も低い。近年、政府はこの世代への支援策を始めているが、将来的に年金水準も低くなることが見込まれ、生活の不安は続いている。デフレの最大の弊害は、こうした世代に長期的かつ構造的な影響を与えた点にある。

12年12月に第二次安倍政権が発足し、13年からアベノミクスが始動した。柱は「大胆な金融緩和」「機動的な財政政策」「成長戦略」の三本の矢である。私は13年３月に日本銀行総裁に就任し、翌４月には「量的・質的金融緩和」の導入が決定された。これは、マネタリーベースおよび長期国債の保有額を２年間で２倍に拡大し、長期金利を引き下げるという非伝統的な政策であった。実はその前の13年１月、日本銀行は白川前総裁のもとで「２％の物価安定目標」を掲げ、金融緩和の方針を示していたが、具体策は未定だった。マクロモデルを用いた内部議論を経て、４月の政策決定会合では全９名の政策委員が一致してこの政策に賛成した。これは日本銀行としても画期的な出来事だった。

その後、13年以降、物価はプラス圏に転じ、デフレからの脱却が進んだ。16年には原油価格の急落、20～21年にはコロナ禍の影響で一時的にマイナスとなったが、経済成長率は基本的には１％台前半の安定した成長軌道に乗っている。14年と19年の経済の落ち込みは消費税増税の影響によるものだった。

近年では、ウクライナ戦争による原油価格高騰が欧米で９％を超えるインフレを招き、各国は急速な金融引き締めを行った。日本でも物価上昇率は２～３％となり、急激な円安が進行。円は一時１ドル160円近くまで下落し、政府の介入で140円台半ばまで戻ったが、依然としてウクライナ戦争前（110円前後）と比べ大幅な円安状態である。

24年春闘では、33年ぶりとなる5.3％の賃上げが実現し、賃金と物価の好循環が始まったと判断された。これを受けて日本銀行は同年３月に金融政策の「正常化」に踏み切った。欧米が急速な利上げに踏み切る中、日本銀行は中立金利を目指す段階的な対応を取り、成長率や物価への影響は限定的とみている。一部では金利上昇による景気への懸念もあるが、私はそのようには考えていない。

理事長対談シリーズ②

松澤建ＦＥＣ理事長×
サクラグローバルホールディング㈱ 松本謙一代表取締役会長

「人付き合い」大切に 海外提携を成功

創業400年以上のグローバルヘルスソリューション企業

松澤建理事長　本日は、民間外交推進協会の副会長・常任理事であり、サクラグローバルホールディング株式会社代表取締役会長の松本謙一様にお話を伺います。松本会長とはさまざまな国への訪問団でご一緒しています。まずは貴社の概要について教えてください。

松本謙一会長　サクラグローバルホールディングは、医療現場での感染防止に貢献する洗浄滅菌事業と、がんの確定診断の迅速化・効率化に寄与する病理診断事業を手がける医療機器メーカーであり、グローバルヘルスソリューション企業です。感染制御では医療機関だけでなく、医薬・ワクチン、調整・水処理設備といったライフサイエンス分野でも当社の技術が活用されています。また、病理診断事業では課題解決のカギとなる「病理の全自動化」を推進しております。

現在、サクラグループは、サクラファインテックUSA、サクラファインテックヨーロッパ（オランダ、傘下に14カ国の子会社を有します）、櫻花医療科技（泰州）有限公司（中国）の拠点を通じて、世界150カ国以上にグローバルに展開しています。

松澤　貴社は歴史のある企業と伺っていますが。

松本　当社は1871年、東京・日本橋で創業しました。その源流はさらに400年以上前、泉州堺の薬種商にあり、幕府の開府とともに江戸・日本橋へと移転いたしました。業祖である松本久左衛門から数えて17代目にあたります。1973年に父・善治郎が急逝したことを受けて、36歳で社長に就任しました。私は17代目の当主ではありますが、「血脈よりも継続」を重んじ、必ずしも嫡男が家業を継ぐとは限らないという考えのもと、いわゆる同族経営とは一線を画しています。

グループの世界展開

サクラファインテックUSA

サクラファインテックヨーロッパ

櫻花医療科技（泰州）有限公司（中国）

欧米進出の先駆けとしての挑戦と戦略

松澤　若くしてトップに就任され50年以上も陣頭指揮をとってこられたことはさぞ大変だったとお察しいたします。貴社の海外展開について教えてください。

松本　63年、当時ロンドンで開催された「国際病院設備および医療機器展示会」に参加し、当社の主力製品を展示し、その足でヨーロッパ、アメリカ、カナダを訪問し大きな成果を上げることができ、海外展開の第一歩となりました。グローバル展開とは単に規模を拡大すればよいというものではありません。同じ500億円の売り上げであっても、市場規模が1000億円か１兆円かによってマーケットシェアは大きく異なります。だからこそ、当社は感染制御と病理診断という２つの領域に特化し、グローバルニッチ戦略を推進しました。

松澤　なるほど。私も60年代から海外ビジネスに携わっていましたが日本の経済力もまだまだで当時の海外展開の難しさも理解しています。貴社の海外展開の転機についてもお聞かせください。

松本　その１つは70年の医療機器分野で世界のトップメーカーであるアメリカン・ステリライザー社（略称アムスコ）との提携です。アムスコ社の高度な技術を吸収し、サクラグループが世界市場に進出するための基礎を築きました。

松本会長（左）と松澤理事長

さらに、翌年には臨床検査試薬および医療機器の輸入販売を行うマイルズ・三共（本社・東京）との販売提携を締結しました。マイルズとの提携は、単なる製品販売にとどまらずマイルズ向けに製品をOEMで提供することにより、サクラの技術水準の高さを世界に広く認知させることができました。

こうした海外企業との提携を成功させるには、やはり人間関係の構築、つまり「人付き合い」が大切であると感じています。

その後、86年にはカリフォルニア州トーランスに現地法人「サクラファインテックUSA」を設立し、98年には同地に１万坪の自社ビルを構えました。単なる販売拠点ではなく、米国市場に根を下ろして長期的な売り上げ拡大を目指すという覚悟の現れでもありました。

松澤　20年以上前になりますが、出張でトーランスを訪れた際、トヨタ、ホンダ、パナソニックと並んで御社の立派なビルを拝見し、感銘を受けたことを覚えております。

松本　ありがとうございます。同様に、ヨーロッパや中国でも事業展開を進めております。

キューバとの交流とODAを通じた再展開

松澤　海外といえば10年前に松本会長とキューバを訪問し、政府関係者と意見を交換しました。貴社のキューバとの関わりについても教えてください。

松本　キューバとの関わりは70年に製品を輸出したことに始まります。かねてより「グローバル化＝欧米化」ではなく「地球化」と考え世界中にアンテナを巡らせていましたがハバナで行われた展示会で、故フィデル・カストロ議長に出会って彼の姿勢に感銘を受けたことが大きいと思います。

キューバでは滅菌装置のノックダウン生産に協力しましたがキューバの外貨事情の悪化で92年工場閉鎖に追い込まれました。

しかし、2016年に安倍晋三首相が日本の総理大臣初のキューバ訪問を果たし、「主要病院における医療サービス向上のための医療器材整備計画」（ODA）を進めることになり、これによりサクラの滅菌装置はキューバのみならず、中南米やアフリカの病院にも導入されるようになりました。これも過去の取り組みが成果につながったものだと思っています。さまざまな国を訪問しましたが、キューバは印象深い国の一つです。

カストロ議長と松本会長（右から２番目）　＝1978年、キューバ

安倍晋三元首相と松本会長（左）　＝2015年、ウズベキスタン

松澤　会長と一緒にキューバを訪問した後の展開は私も自分のことのように嬉しく思いました。会長の経営者としての理念をお聞かせください。

「責任は私、手柄はあなた」損得考えず

経営者としての信条と「３つの心」「４つの大切さ」

松本　私が会社を経営するうえで常に大切にするのは、「３つの“心”」の重要性です。

１つ目は「利他の心」です。まず業界全体の発展があり、その先に自社の成長があると捉えています。

２つ目は「協業の心」です。近年の技術革新は目覚ましく、自社ですべてをまかなうには時間もコストもかかりすぎてしまいます。特にハイテクやDX分野においては、オープンイノベーションが重要ですし、他社との「協業」は大切です。

３つ目は「ユーモアの心」です。これは言い換えると「心のゆとり」を持つことでもあります。他者を巻き込みながら、何事も楽しく取り組もうというのが、私の生き方です。誰かと議論を交わす際には、最初から相手を否定するのではなく、まずは相手の主張にうなずいた上で、自分の意見を伝えるという“Yes, but….”　の話し方を心がけています。そうすることで、気持ちよく意見交換ができ、相互理解が深まり、人とのつながりも広がっていきます。

また、最近、「４つの大切さ」を実感します。

①「マクロ」から「ミクロ」を見て考え、行動を起こすことの大切さ

②「未来」といっても、「近みらい」か「遠みらい」か、を見極めることの大切さ

③「現場」に触れて、感じて、考え、行動することの大切さ

④的確な情報を集め、行動に移すことの大切さ

昨今はオンラインで海外の方々とも容易に会議を行える時代になりましたが、それでもまずは現地に赴き、相手と会うことが大切だと考えています。

松澤　なるほど。多角的な視点を持ち、人と会う、現場を見ることで初めてわかることがあるというのは私も実感します。ところで松本会長は、小泉元首相をはじめ多くの政治家の方々ともお親しいと聞きましたが。

松本　長年の経験を通じて小泉純一郎元首相をはじめとする多くのVIPの方々と知り合う機会に恵まれました。そうした方々からいただく言葉が心に沁み、人脈の大切さを実感します。

「人の上に立つには何が必要か」という問いに対して、次のような言葉をいただきました。

「才能や運は持って生まれる者もいるが、成功体験や失敗体験といった『経験』は、生まれながらにして持っている人はいない。いかに豊かな経験を積んでいるかが重要だ」

この言葉に深く共感いたしました。

松本謙一　1936年、東京生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。同工学部機械工学科研修生終了。61年、サクラ精機株式会社に入社。取締役、社長を経て、90年より会長。現在、サクラグローバルホールディング株式会社の会長・CEO、サクラファインテックジャパン株式会社の名誉会長ほか、グループ各社の取締役を務める。日本医療機器学会をはじめとする業界団体の役員を歴任し、現在、（一社）日本医療機器工業会の理事長、（一社）日本医療機器産業連合会の副会長などを務める。2013年には（一財）松本財団（その後松本記念財団に改称）を設立。東京都知事表彰、厚生大臣表彰、藍綬褒章、旭日中綬章などを受賞。

業界全体の繁栄のために

松澤　会長は、自社のことだけではなく業界全体のことを考え活動されていることを伺いました、現在の医療機器産業の課題について教えてください。

松本　医療機器産業全体を見渡したとき、３つの課題があると考えています。

１つ目は「製品の安定供給」です。資材不足や人手不足、さまざまな困難があります。

２つ目は「医療DX（デジタルトランスフォーメーション）」です。当社でもDXを積極的に推進しますが、業界全体も、さらなる推進が必要だと考えています。

３つ目は「国際展開」です。こうした課題解決の一助になればと「ヘルスケア」の次世代を担う国際医療プロフェッショナルを育成することを目的として一般財団法人松本記念財団を設立しました。

看護師の方々が海外学会で発表する費用の一部を助成する制度、看護師や薬剤師のための英会話レッスン外国語教育の支援、文部科学省の「トビタテ！留学JAPAN」への寄付、さらにはNPO法人ロシナンテスなどへの支援も行っております。

看護師の為の英語レッスン
（松本記念財団）

そのロシナンテスの理事長でもある川原尚行先生は、20年以上にわたりスーダンや、ザンビアなどアフリカで医療支援活動を継続されています。お話を伺うと、その現場経験の重みがひしひしと伝わってまいります。そうした方々と知り合う機会を持つことも重要だと考えています。

松澤　会長は環境問題にも積極的に取り組んでいると伺っております。

松本　はい。当社は、使用済み単回使用医療機器の再製造推進に取り組んでいます。環境負荷の軽減を目的とした社会貢献活動の一環です。また業界レベルで「単回使用医療機器再製造推進協議会（JRSA）」を立ち上げ、松本記念財団が事務局を務めております。

EUでは、医療の安全と資源の有効活用を目的に、「グリーンサージェリー（Green Surgery）」の考えのもと、単回使用医療機器の再製造が推進されており日本でも17年７月に同様の制度が創設されました。今後は限られた医療資源を有効に活用し、環境負荷を低減することで、持続可能な医療の実現に寄与していきます。

松澤　今年は大阪・関西万国博覧会が開催されていますが、業界もこれに関連した催しはありましたか？

松本　医療機器業界の特筆すべきイベントに「Japan Health」がありました。医療・ヘルスケア分野に特化した国際見本市であり、25年６月にインテックス大阪にて初開催されました。これはEXPO 2025 大阪・関西万博の公式関連イベントとして、「健康とウェルビーイングウィーク」と連動して開催されたものでもあります。この見本市には、国内外の医療機器メーカー、スタートアップ、研究機関、行政機関、ヘルスケア関係者が集結しました。

松澤　会長がここまで業界活動に取り組む理由を教えてください。

松本　私が業界活動に取り組む理由は、自らの損得ではなく、業界全体の発展を願う気持ちからです。とはいえ競争相手でもある同業者と連携し、まとめていくことは決して容易ではありません。そのような時でも、「責任は私が取る、手柄はあなたにあげる」という姿勢で臨めば、人は自然と動いてくれるものです。

今年で数え年90歳になります。社会貢献活動を続けるためには、まず健康であることが何よりも大切です。そのため、毎朝15分のストレッチと110回の腕立て伏せを日課とし、朝食は自ら１週間分をまとめて作った健康食を食べています。現在でも月に２回は内外出張をこなしております。

松澤　奉仕の精神というのは大切ですね。私もお国のためにという気持ちで民間外交推進協会の活動をやっています。最後に、民間外交推進協会に期待することについて一言お願いします。

民間外交推進協会への期待

松本　私は、数多くの民間外交推進協会の海外訪問団に参加しました。常に強く感じてきたのは、訪問先の政府高官と会い、具体的な議論を行えるという点が最大の強みと思います。

高いレベルとの交流をきっかけに、訪問国の現場レベルへと活動を落とし込み、国家戦略に基づいた「マクロからミクロまで」の実効性ある活動を展開できている点は、素晴らしいことであると感じています。

今後も、民間外交推進協会がこのようなかたちで各国に訪問団を派遣し、民間外交のさらなる発展に貢献されることを心より期待します。

松澤　本日はお忙しいところありがとうございました。今後の貴社グループのさらなる発展と、当協会でのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

「TICADを通して見た、日アフリカ関係の変遷」

支援提供国から信頼できるパートナーへ

第292回 国際研究会

丸山則夫TICAD担当大使

FECは７月10日、丸山則夫TICAD（アフリカ開発会議）担当大使を迎えて「TICADを通して見た、日アフリカ関係の変遷」をテーマに第292回国際研究会を如水会館にて開催した。松澤建FEC理事長の開会挨拶の後、丸山大使が講演を行い、最後に質疑応答が行われた。

【講演要旨】

私はアフリカの専門家とは言えないが、長年TICAD（アフリカ開発会議）を通してアフリカに関わってきた。アフリカとの関係ではアフリカ部長、駐南アフリカ大使を経て、現在はTICAD担当の特命全権大使を務めている。TICADは過去３回経験しており、今回のTICAD９で４回目となる。アフリカは私の長い外務省生活の中でも特に愛着のあるフィールドである。

■TICAD創設の経緯と理念

TICADは1993年、日本政府の主導で創設された。当時、冷戦終結により国際社会の関心はアフリカから遠のき、支援の後退や内戦の多発が課題となっていた。こうした状況の中、日本は国際社会全体でアフリカを支援する契機とするためTICADを立ち上げた。第１回会議にはアフリカ首脳のほか、欧米諸国、アジア諸国、国連、市民社会などが参加し、日本が提唱する「オーナーシップとパートナーシップ」などの理念が共有された。TICADの最大の特徴は、参加者が対等な立場で開かれた議論を行えるプラットフォームを提供している点にある。ちなみに同年開催されたＧ７東京サミットでは、Ｇ７としてのTICADへの期待が述べられた。

■TICADの発展と日アフリカ関係の深化

TICADはこれまで８回開催され、内容・形式ともに進化を続けてきた。その間、アフリカを取り巻く環境も変化した。2000年には中国がFOCACを開始、米国はAGOA（African Growth and Opportunity Act）を開始、02年にはＧ８がアフリカ行動計画を採択、また、アフリカ連合（AU）も発足した。そうしたアフリカを巡る前向きな環境の中で03年に10周年の節目を飾ったTICAD Ⅲ（03年）、そしてＧ８北海道洞爺湖サミットが開催された08年にはTICAD Ⅳが開催された。TICAD Ⅳでは民間投資倍増支援が打ち出され、官民のパートナーシップが強化された。TICAD Ⅴ

（13年）からはアフリカ連合委員会も共催者に加わり、アフリカとの関係がさらに強化されるとともに官民の連携も一層深まり、「民間との対話」が創設された。TICAD Ⅵ（16年）は、初めてアフリカ（ケニア）で開催され、以後TICADは日本とアフリカと交互で実施されることとなる。「自由で開かれたインド・太平洋（FOIP）」の理念が打ち出されたのはTICAD Ⅵの場である。TICAD７（19年・横浜開催）では、民間がTICADの正式なパートナーとなり、ビジネスを行いやすい環境作りの強化や富を創出するインパクト投資が奨励された。直近のTICAD８（22年・チュニジア）では、ポストコロナの経済回復、グリーン成長などが議題となり、人への投資、成長の質が議論され、TICADが常に時代のニーズに応じ柔軟に進化していることが確認された。

■日本の対アフリカ政策の今後の課題と展望

資源大国であるアフリカは今後、世界で最も急速に人口が増加する地域として注目される一方、多くの課題も抱えている。日本は、TICADを通じた官民連携や時には第三国との連携によりアフリカが特に日本に求める雇用創出、人材育成、技術移転、投資を実現していくことが重要である。その一方で、日本は単なる支援提供国ではない。アフリカとともに歩み、解決策を提供し合う信頼できるパートナーとしての役割が求められており、それこそが、今後の日本の対アフリカ外交の鍵となる。25年８月20～22日横浜で開催予定のTICAD９は、不透明な国際環境下における日本とアフリカの信頼と共創を深める貴重な機会となる。

「トランプ外交の本質と国際秩序の転換」

日本は冷静かつ主体的に防衛と外交強化を

第293回 国際研究会

秋田浩之日本経済新聞社コメンテーター

FECは７月14日、秋田浩之日本経済新聞社コメンテーターを招き、「トランプ外交の本質と国際秩序の転換」をテーマに第293回国際研究会をオンラインで開催した。松澤理事長の開会挨拶の後、秋田氏が講演を行った。続いて参加者による質疑応答があり、多くの意見交換が行われた。

【講演要旨】

本日は、私自身のオフレコ取材と分析をもとに、トランプ政権の構造、外交の本質、そしてそれがもたらす国際秩序の変化についてお話しする。

まず、トランプ政権の権力構造について、私は長らく複数の派閥がせめぎ合う体制を想定していた。しかし、実際にワシントンで取材して分かったのは、そうした派閥は存在せず、政権の意思決定がトランプ氏個人に極度に集中しているという点である。この「太陽系モデル」とも呼べる構図の中で、閣僚や補佐官たちはまるで太陽を回る惑星のように配置され、忠誠心を疑われれば政権中枢から弾き飛ばされる。国家安全保障会議（NSC）の機能は形骸化し、伝統的なボトムアップ型の政策決定はほとんど見られない。

この体制のもとでは、政策は極端に振れやすく、予測が極めて困難になる。実際に、関税の発表から数日での方針転換や、攻撃命令から一転した停戦のような事例も確認されており、政権の意思決定はその日の大統領の気分や周囲の忖度に大きく左右されている。

外交面では、トランプ氏が頻繁に口にする「ディール」は手段でしかなく、本質は「アメリカは長年搾取されてきた」という被害者意識にある。軍事的な負担、巨大市場の一方的開放、ドル基軸通貨の維持といった国際貢献に対して、十分な見返りがないという認識が根底にある。この発想から、彼はそれらを「取り戻す」ことを外交の中心課題としている。

ディールの対象となる相手は中国やロシアなど、対等と見なす大国に限られ、日本や欧州に対しては交渉というよりも圧力や強制に近い態度が取られる。特に中国に対しては、共産党体制に対する怒りとともに、習近平主席個人には尊敬と羨望が入り混じった評価を下しており、ディールの成立を期待して積極的に会談の機会を探っているように見える。

欧州では、ロシアのウクライナ侵略によって安全保障環境が一変しつつある。エストニアを訪れた際、NATOによる実戦想定の演習が行われており、欧州は「準戦時状態」にあると実感した。フランスと英国は核協力を強化し、アメリカ抜きでも欧州を守る体制を真剣に模索している。米国を「敵対的パートナー（adversary）」と見なす空気すら一部で広がっている。

中東においては、イランの代理勢力が弱体化し、代わってイスラエルとトルコの間でシリアをめぐる対立が激化している。イスラエルはシリアの再強化を警戒し、爆撃を繰り返しており、トルコとの緊張が地域の安定に影響を与えつつある。新興国も当初はトランプ再登場に期待を寄せていたが、関税や一方的な要求の現実を前に、その対応に苦慮している様子が見受けられる。

最後に、現在の世界情勢は1938年のミュンヘン会談の構造に酷似している。あのとき、チェコスロバキアの一部割譲を認めた結果、ナチス・ドイツは勢いづき、第二次世界大戦へと突き進んだ。いまロシアによるウクライナ占領を追認するような形になれば、歴史は繰り返されるかもしれない。

世界の各地で火種が同時並行的に存在し、米軍の対応力にも限界がある中、我々はリスクを現実として受け止め、冷静かつ主体的に防衛と外交を強化していく必要があると考えている。

法人化に向け11月21日臨時総会開催へ

FECは７月15日、常任理事会を開催し、渡部賢一会長、髙村美己志副会長・常任理事、松本謙一副会長・常任理事ら10人が出席した＝**写真**。

開会宣言の後、定款に基づき渡部賢一会長が議長となり、議長の指名を受けた松澤理事長が各議案について説明を行った。第１号議案「会員の入会承認の件」では、前回の常任理事会（５月20日開催）以降に入会申し込みのあった個人２人、駐日大使４人がそれぞれ個人会員、名誉会員として承認された。また第２号議案「常勤理事の報酬等の件」では、６月に常勤理事になった２人の月額報酬が承認された。第３号議案「職員退職金支給規程改定の件」では、職員退職金支給規程改定について承認を求めるものであることが説明されたが、継続検討することになった。

続いて報告事項として、▷月次決算報告の件▷支払実施報告の件▷要人等を迎えての研究会等開催の件▷11月21日の法人格取得に関する臨時総会招集の件▷同日の会員懇親会開催の件▷LFEC事業の件▷次回常任理事会開催期日等の件―についてそれぞれ説明を行い、各報告内容が了承された。

「ルーマニア・フォーラム」

優れたビジネス環境 経済協力拡大に期待

第153回 欧州研究会

オヴィディウ・アレクサンドル・ラエツキ駐日ルーマニア大使

FECは７月３日、オヴィディウ・アレクサンドル・ラエツキ駐日ルーマニア大使のご厚意により、第153回欧州研究会（ルーマニア・フォーラム）をルーマニア大使館にて開催した。松澤建FEC理事長の開会挨拶に続き、ラエツキ大使による講演が行われた後、アドバイザー兼通訳の穴原アレキサンドゥルゥ勇気氏およびインターンのモスクエダ・アミラ氏によるプレゼンテーションが行われた。さらに、ヨネスク・アドリアン＝フロリン公使参事官よりルーマニア経済に関するプレゼンテーションがあり、参加者による自己紹介や質疑応答を経て、最後にネットワーキングの時間が設けられた。

【大使講演】

ルーマニアは東ヨーロッパに位置し、黒海に面している。黒海に面するという地理的条件により、安全保障・物流・資源供給・地域外交の各分野において重要な位置を占める。黒海はドナウ川の河口として機能し、コンスタンツァ港を通じて地中海や世界市場と結ばれている。また、沿岸にはチェルノーゼム（黒土）と呼ばれる肥沃（ひよく）な土壌が広がり、穀物栽培と輸出を支える国家経済の柱となっている。近年はウクライナ戦争をはじめ、モルドバ、ジョージア、アルメニア、アゼルバイジャン間の紛争が続いており、とりわけロシアの軍事的・外交的関与が地域の安全保障に影響を与えている。

言語的・文化的には、ルーマニア語はローマ帝国支配期に起源を持つラテン語系言語であり、東ヨーロッパで唯一、ロマンス語を公用語とする国である。支配は短期間だったが、ラテン語の影響は現在まで続いており、西欧諸語との親和性が高い。この言語的特性は、ルーマニアの文化的アイデンティティの核心である。

また、ルーマニアは歴史的に３地域に分かれ、それぞれ異なる外部勢力と関係を築いてきた。ワラキアはオスマン帝国、モルダヴィアはポーランド・リトアニア、トランシルヴァニアはオーストリア・ドイツとのつながりが強かったが、共通の言語と価値観が国家の統合を支えてきた。

1859年のワラキアとモルダヴィアの統一を皮切りに国家形成が進み、第一次世界大戦後に領土を拡大した。第二次大戦後は共産主義体制が敷かれたが、1989年の革命で民主化が始まり、欧州統合を国家戦略と位置づけた。2004年にNATOに加盟、07年にはEU加盟を果たし、現在では欧米との連携を軸に地政学的地位を高めている。

ルーマニア大使館は、ノルウェー大使館とともに、今年、日本におけるコンタクトポイント大使館を務めている。

【穴原氏およびアミラ氏プレゼンテーション】

ルーマニアは冷戦終結後、NATOとEUへの加盟を通じて西側諸国と価値観を共有し、自由と民主主義の体制を確立してきた。04年にNATOに正式加盟し、それ以前からアフガニスタンやイラクでの協力を通じて関係を深めていた。加盟後は防衛支出を基準に引き上げ、東欧の安全保障において重要な役割を果たしている。EUは東方拡大を進め、ルーマニアは07年に加盟した。経済・法制度の整備が進められ、域内での経済的プレゼンスも高まっている。NATOは第５条の集団防衛、第３条の自助努力を原則とし、危機管理や抑止力の強化、国際協力に注力している。近年は日本などインド太平洋諸国との連携も進み、2030年までにルーマニアにNATO最大級の軍事基地が設置される予定である。

【公使参事官プレゼンテーション】

ルーマニアは安定した経済基盤と低い税率（フラット税・付加価値税）を持ち、国際投資先としての魅力を高めている。生活コストは西欧諸国より大幅に低く、創造性ある労働力と相まって、テクノロジー企業の進出が進む。再生可能エネルギーと原子力を組み合わせたエネルギー政策により、輸入依存度も低い。ウクライナ復興の中継拠点としても戦略的な役割が期待されている。日本企業にとっても、コストと品質のバランスに優れたビジネス環境が整っており、今後の経済協力の拡大が見込まれている。

大阪・関西万博　ウズベキスタンパビリオン

豊かな文化遺産を巡る旅への誘い

それは一粒の種から始まり、やがて知識の庭へと花開く。

ウズベキスタンパビリオンは、「知識の庭：未来社会のための実験室」というテーマを掲げ、同国の豊かな文化遺産を巡る旅へと誘います。ウズベキスタン芸術文化振興財団（ACDF）によって企画され、数々の国際賞の受賞歴を誇るATELIER BRÜCKNERのデザインによって具現化されたこのパビリオンは、生命の循環を象徴し、人と自然の調和を空間的に表現しています。

何世紀にもわたり、ウズベキスタンの庭園は、憩いの場としてだけでなく、文化交流の拠点、知的探求の場、人々がつながり集う社交の空間として重要な役割を果たしてきました。そこには楽園のような美しさが広がっています。このパビリオンは、レンガや粘土、大阪周辺の山々の杉の木を融合させて造られ、ウズベキスタンの庭園と建築遺産を現代的に再解釈したものです。二層構造で三角形の敷地に建てられ、その形は中央アジアの古代のお守り「トゥマール」にも通じます。この旅を通じて、古来の伝統から現代の革新に至るまで、ウズベキスタンのDNAを丁寧に紐解きながら、職人技、技術、素材、持続可能性、科学、建築、歴史、創造性を探求していきます。

土の奥深くに眠る種や根から、空へと広がる森、花、果実の実りまで―。生命を祝福するこの旅を通じて、ウズベキスタンの真髄へと迫り、「知識の庭」が織りなす美と叡智の世界へとたどり着きます。

日本でウズベキスタンのナショナルデー開催

2025年８月17日、大阪で開催中の万博においてウズベキスタンのナショナルデーが盛大に行われました。

EXPOナショナルデーホール「レイガーデン」で開催されたナショナルデーの式典では、ウズベキスタンと日本の国旗が掲げられ、国歌斉唱も行われました。この式典には藤井比早之外務副大臣、ウズベキスタン共和国大統領府クリエイティブ経済観光局局長を兼務するガヤネ・ウメロワ文化芸術振興財団理事長、ラジズ・クドラトフ投資産業貿易大臣、ムクシンクジャ・アブドゥラフモノフ特命全権大使の他、日本の国会議員や省庁、ビジネス界、メディアの関係者らが出席し、500人以上が来場しました。

また、国立舞踊団バホールやウズベキスタン功労芸術家ノディラ・ピルマトワ、一流のミュージシャンなどによるコンサートも開かれました。

式典終了後、民族衣装を纏ったアーティストやカルナイ・スルナイ、ドイラなどの民族楽器の奏者、人形使いなどが大屋根リングの下を練り歩くパレードも行われ、この日万博に来場した５万人以上の人々がそれを楽しみました。

同日、ウズベキスタンパビリオンにおいて、ウズベキスタン芸術文化振興財団、奈良市、奈良国立博物館の三者間で、27年に奈良国立博物館でウズベキスタンの文化・歴史遺産を紹介する「特別交流展」を開催するための協定書の調印式が行われました。

この大規模な共同文化プロジェクトにより、我が国の文化遺産が日本でさらに広く紹介され、サマルカンドと奈良の姉妹都市関係と学術・博物館分野の協力が拡大されることが期待されます。

ウズベキスタン・パビリオン「知識の庭：未来社会のための実験室」

ナショナルデーでのウズベキスタンと日本の国歌斉唱の様子

ナショナルデーで披露された民族舞踊

ウズベキスタン・ナショナルデーで披露された民族舞踊

万博来場者５万人以上を魅了したウズベキスタンのパレード

協定書調印式（左から仲川奈良市長、ウメロワ理事長、奈良国立博物館井上館長）

Credits：The Uzbekistan Art and Culture Development Foundation（ACDF）

大阪・関西万博　シンガポールパビリオン

自然と調和した都市国家 多様な夢が舞う

７月12日に100万人目の来場者をお迎えしたシンガポールパビリオンは、Where Dreams Take Shape「ゆめ・つなぐ・みらい」をテーマにしています。国が歩む道には様々な夢があり、どのようなことがあっても、未来を思い描き、革新し、創造し続けるシンガポールの人々の回復力を映し出す夢であり、自然と調和して生きることを目指す都市国家の夢ととらえています。また、人々と植物、動物が共生する、自然と調和した都市国家を目指す夢を表現しています。パビリオンの建築や内装など全体のキーメッセージは、革新性、回復力、社会的包摂、持続可能性です。

印象的な赤い大きな球体のパビリオンは「ドリーム・スフィア（夢の球体）」と呼んでいます。これは「リトル・レッド・ドット」というシンガポールの愛称を表したもので、１万7000枚ものリサイクルアルミで作られたドリーム・ディスクと呼ぶ円盤で飾られています。この円盤も大きさや色調、質感が画一ではなく、それはシンガポールの多様性と、全ての人々が持つ大小様々な夢の多様性を象徴的に表しています。

パビリオン内では、シンガポール人アーティストによるアートインスタレーションで、シンガポールのビジョンでもある「シティ・イン・ネイチャー」を紹介しています。自然と都市開発や住宅の共存を美しく描き、気候温暖化や海面上昇などのグローバルな課題へのシンガポールの取り組みをアニメーションを通してあらゆる年代の方にもわかりやすく伝えています。

来場者の人気を博しているドリーム・リポジトリでは、来場者は自分の夢を絵や文字にして描くことができます。描いた夢は、上階のドームスクリーンにアニメーションと共に映し出され、夢の力を示しながら、そこに集う他の来場者と夢を共有するという展示です。ドームを後にするとそこには本物の木や植物に囲まれたドリーム・フォレストで、パビリオンのオリジナルグッズやシンガポールの製品を取り扱うドリーム・ブティックでのお買い物や、シンガポールのジンのブランド監修のカクテルやお酒も楽しめるクラウド・バーのドリンクでのんびりと過ごすこともできます。夕方には、シンガポールの障がい者アーティスト、ファーン・ウォンの作品にインスピレーションを得た音と光のショー「マジック・アワー」を開催しています。

最後に１階に降りると、外からもアプローチ可能なショック！カフェがあり、ここではチキンライスやラクサ、ロティプラタなどのシンガポールの名物料理が食べられます。

イベントも様々開催しており、６―７月には「持続可能で革新的な都市ソリューション」と「ライフスタイル」をテーマにビジネスイベントを10本開催しました。またEXPOの会期を通して音楽やダンス、文化体験、プレゼントキャンペーンなどのイベントも開催しています。８月末までは、館外キャンペーンとしてシンガポールの在来種の鳥を折り紙で折る「サニー折り紙キャンペーン」も実施していました。シンガポール館とシンガポール政府観光局のマスコットキャラクターのマーリーは１日３回グリーティングを行い大変な人気です。

大阪・関西万博閉幕まで、残すところ１カ月あまりとなりましたが、シンガポールパビリオンで、より多くの来場者と夢を共有し、より良き未来への希望をつなげていきたいと思っています。

赤い球体が印象的なシンガポールパビリオン外観

館内に入るとシンガポール人アーティストのアートインスタレーションが見られます

ドリーム・リポジトリで描いた夢がドームスクリーンに映し出されます

シンガポール料理が楽しめるショック！カフェ

６―７月に開催されたビジネスイベントの１シーン

様々なパフォーマンスやその他のイベントは万博会期を通して開催されます

大阪・関西万博　タイパビリオン

医療とウェルネス「世界の目的地」へ

「プーム・ピマーン（免疫の地）」というコンセプトで威風堂々と大阪・夢洲の地に立つタイパビリオン。2025年大阪・関西万博において、４月13日～10月13日の６カ月間、「豊かな食文化を楽しみ、健やかに暮らし、強い免疫力をもつ国」としての伝統的な知恵や医療技術の革新を紹介します。また、世界の調和と発展を目指して、日本をはじめ各国と創造的な対話を通じて投資機会の可能性を広げ、パートナーシップ構築の場としての役割も果たします。

パビリオンは、タイの寺院にも使用されている伝統的建築と現代的なデザインを融合したユニークな意匠となっています。パビリオンの屋根は優美な傾斜となっており、来場者が正面から見ると、反射する壁によって完璧に対称的な屋根が映し出されるよう設計されました。そして、象（豊かさの象徴）と木（知恵をもって資源を大切に活用する象徴）という２つの象徴によって表現されています。

パビリオンのテーマは「大きな幸福のため､いのちをつなぐタイ」｡タイ保健省が主導し、知恵と革新が融合した、タイの医療と公衆衛生の可能性を余すところなく紹介しています。展示では、国際認証を受けている医療サービスや技術、ハーブを活用した伝統医療の紹介だけでなく、ユネスコ無形文化遺産に登録されている古式マッサージ、没入型体験による自然の音、伝統衣装、香り豊かなアロマやタイ料理などもご体験いただけます。

４月24日にはタイパビリオンの開幕式典が開催され、タイ保健大臣ソムサック・テープスティン氏、駐日タイ王国特命全権大使ウィッチュ・ウェチャーチーワ氏、公益社団法人2025年日本国際博覧会協会事務総長の石毛博行氏が登壇されました。政府高官や企業関係者が参列し、盛大に執り行われました。会期中はタイの伝統的な暮らしや文化を反映した舞踊が、パビリオン外にあるステージにて毎日公演されています。８月18日にはタイのナショナルデーがあり、様々なパフォーマンスが上演される予定となっています。

タイは医療観光産業に力を入れており、先進的な医療サービスやホスピタリティによって世界トップ５の医療観光地として位置づけられています。ソムサック・テープスティン保健大臣は、「タイは、医療とウェルネス分野で世界のハブになることを目指している。大阪・関西万博への参加を通じて、タイの医療とウェルネスの卓越性を強調できることを嬉しく思う」と述べています。さらに、「タイが医療とウェルネスのハブとして魅力的なのは、先進的な医療制度だけでなく、優れたおもてなしの精神、豊かな文化遺産、美しい自然環境にもある。タイパビリオンではこれらを直接体験する機会を提供する」としたうえで、「来館者がタイ医学に興味を持ち、実際にタイに訪れてくれるのを願っている」と強調しました。

タイの伝統と現代性が融合したデザインのパビリオン

毎日公演される、多様なテーマの伝統舞踊

タイの医療・公衆衛生システムを紹介する展示

本場の味が楽しめるタイ料理の数々

タイ古式マッサージの体験

写真 © 2025 タイ保健省

大阪・関西万博　トルクメニスタンパビリオン

文化と未来を映す三層構造 輝き放つ存在感

大阪・関西万博において注目を集めておりますトルクメニスタン館は、その堂々たる外観と夜間のライトアップによって会場全体を魅了し、訪れる多くの方々の心を惹きつけております。

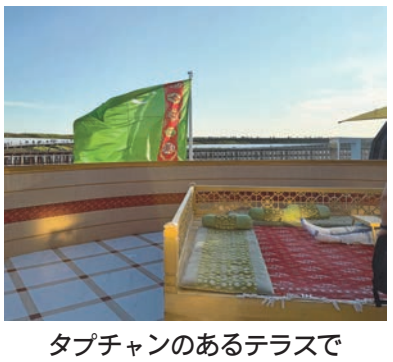
館内は三層構造となっており、それぞれに異なる体験をご用意します。1階は「イマージョンルーム」と呼ばれる大画面シアターです。約4分間の映像では、トルクメニスタンの歴史や文化、伝統をご紹介するとともに、現代の主要プロジェクトや日本との友好関係を映像と音響でわかりやすくお伝えいたします。スクリーンに広がる壮大な映像世界が、訪れる皆さまを国の物語へと誘います。

2階はメイン展示エリアで、全部で12のコーナーがございます。輸送通信省の展示では、国民の日常的な交通手段や人工衛星の打ち上げについてご覧いただけます。また、伝統工芸である銀細工は、金と並ぶ高い価値を持つ文化財として展示されております。教育関連の展示では、日本語教材を多数ご紹介しており、トルクメニスタンにおける日本語学習の広がりをご覧いただけます。2018年には「世界で最も日本語学習者が増加した国」として表彰されております。さらに、砂漠に自生する薬草から作られたお茶や、考古学的な出土品、古代の装身具なども展示されており、幅広い分野でトルクメニスタンの魅力を知っていただけます。繊維産業や伝統的な手織り絨毯、新しい民間企業の製品展示なども行っており、伝統と発展の両面をお楽しみいただけます。さらに未来都市の展示では、デジタル技術を活用したスマートホームや電気交通など、持続可能な都市づくりの取り組みをご覧いただけます。

3階にはレストランとテラスがございます。館内の壁には、トルクメニスタンの伝統的な婚礼衣装が飾られており、文化の華やかさを感じていただけます。テラスには「タプチャン」と呼ばれる屋外の休憩スペースが再現されており、皆さまに憩いのひとときをお楽しみいただけます。ここでは、ピシメやシェクシェキ、ドグラマ、パロウ、ソムサなど、郷土料理をお召し上がりいただけます。異国の味覚を体験できるのも大きな魅力です。

このように「見る・学ぶ・味わう」を体験できるトルクメニスタン館は、壮麗な外観と充実した展示内容を兼ね備え、万博の理念である「未来社会の実験場」にふさわしい存在感を示しております。夜にはさらに輝きを増すパビリオンが、訪れる方々に新たな気づきと文化交流の喜びをお届けします。

夕陽に染まるトルクメニスタン館


タプチャンのあるテラスで伝統の寛ぎを

トルクメニスタン館の展示エリア―歴史と文化、そして未来への歩みを映し出す空間

トルクメニスタンの世界へ没入するイマージョンルーム

大阪・関西万博のトルクメニスタン館内に併設されたレストラン

大阪・関西万博　ルクセンブルクパビリオン

「ドキドキ感」に火をつける、循環型デザイン

国際協力がますます問われる中、ルクセンブルクは2025年大阪・関西万博において、オープンでウェルカムな国としての価値を強調するパビリオンを出展しています。万博のサブテーマ「いのちをつなぐ」に沿い、ダイナミックで信頼性の高い国であることを知ってもらうため、人と国のつながりを強調しています。この使命はパビリオンのテーマ「ドキドキ–ときめくルクセンブルク」に凝縮されています。

パビリオンはルクセンブルクと日本の企業、チームによって設計、建設、設置され、循環型経済の原則に沿う「サーキュラー・バイ・デザイン（循環型設計）」。可能な限り少ない材料で建設され、多くの部品が再利用でき、解体を想定したデザインとなっています。

建物に入る前、来場者は「Virtual Rangers」と「Artec 3D」の共同開発によるルクセンブルクの風景を紹介するアプリを通じ、拡張現実体験に浸ることができます。パビリオンではより良い体験を提供するため、没入型かつインタラクティブな3つのアクトをお楽しみいただけます。

・アクト1「人々」：ルクセンブルクの様々な環境に暮らす人々と出会う場。多様性に富んだ社会を通じて人々の開放性を強調

・アクト2「アイデア」：ルクセンブルクがイノベーションの拠点であることを紹介。ゲームスタイルの体験で小さな一歩が大きな影響を与えることを学ぶ。無料の公共交通、宇宙技術、衛星通信インフラ、循環型経済、健康・研究などの取り組みを紹介

・アクト3「ルクセンブルクの一日」：風景、文化、自然を巡る、興奮と感動が融合したユニークな没入型の旅を提供。美しさと多様性に浸り、忘れられない体験となる

パビリオンでの体験を終えると、中庭ではルクセンブルクのノウハウが詰まった料理や地元産ワインなどを楽しめます。ルクセンブルクホスピタリティ・観光学校（EHTL）が、名物料理を日本風にアレンジしたメニューを担当しています。

またエンターテインメント性、伝統に関するストーリーが刻まれたボウリング場「ケーレブン」もあり、ルクセンブルクの和気あいあいとした精神とスポーツの伝統を象徴しています。このケーレブンは世代を超えて力を合わせて建設されたもので、中古部品を一部使用し、ここでも循環型経済の原則に沿っています。

ご来場が難しい方は、アプリ「Luxembourg Pavilion」を通じて体験できます。主要なアプリストア全てでダウンロード可能です。

また、万博におけるルクセンブルクのナショナルデーで、アンリ・ルクセンブルク大公国大公殿下は皇太子殿下に職務を引き継ぐ前の最後の海外公式訪問を行われました。ご挨拶の中で、大公殿下は「ルクセンブルクパビリオンは、調和して働くことで何が実現できるかを示す素晴らしい例。日本とルクセンブルクの企業間の驚くべき協力の成果だ」と述べられました。

ルクセンブルクパビリオンは循環型経済の原則に基づいた設計で、分解が容易な構造となっています

照明付きパビリオン膜

アクト1「人々」：ルクセンブルク在住の人々と出会える場所

アクト2「アイデア」：ルクセンブルクがイノベーションの拠点であることを紹介

アクト3「ルクセンブルクの一日」：風景と文化を深く体験する旅

「ケーレブン」9ピンボウリング場：地域コミュニティの結束を祝う伝統的なレーン

ルクセンブルク＠大阪万博2025（経済利益団体（GIE））

Courtesy Call

■駐日ハイチ共和国大使

在任中に「親善協会」設立を

▷７月９日＝ルイ・ハロルド・ジョセフ駐日ハイチ共和国大使

小方俊也FEC専務理事は、ルイ・ハロルド・ジョセフ駐日ハイチ共和国大使を訪問した。大使はハイチ国立大学法経済学部（ポルトープランス）にて経済学士号を取得し、ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院（SAIS）では国際公共政策修士号（MIPP）を取得。キャリアのスタートは商工省のエコノミストで、1982年から在米国大使館に勤務、商務担当二等書記官からスタートし駐米大使まで通算22年間米国で勤務。その他、駐バハマ臨時代理大使、駐日臨時代理大使を歴任し、2025年４月に着任した。

【大使のコメント】

2016年から１年間、臨時代理大使として日本に赴任したが、日本からの投資を誘致するという当時のミッションを十分に達成できなかった。そのため、今回改めて大統領にお願いし、大使として再び赴任する機会を得た。

来日前から、日本をよく知る友人たちから「日本人の優しさや勤勉さ」については聞いていたが、実際に暮らしてみると、社会全体に行き届いた躾に深く感銘を受けた。礼儀や時間厳守の精神などは、他の国には見られない美徳だと感じている。また、日本の自然の美しさにも心を打たれた。特に徳島県を訪れた際に見た、吉野川と周囲の山々が織り成す風景は非常に印象深かった。一方で、コミュニケーションの観点から見ると、東京や大阪などの大都市を除けば、依然として言語の壁を感じる場面もある。

10年にハイチでは大地震が発生し、未曽有の被害を受けた。その後、約３年間にわたり日本の自衛隊施設部隊がPKO（国連平和維持活動）として派遣され、倒壊した建物の瓦礫撤去や道路補修などに尽力してくれた。日本政府には、19年３月末までに総額3.2億ドルを超える復興・開発支援を行っていただき、心より感謝している。

現在、日本とハイチの貿易額はわずかではあるが、ハイチにある自動車の95％は日本製である。これは、日本製品に対するハイチ国民の強い信頼を示すものである。私の大使としての使命は、何よりも日本からの投資を誘致することにある。現在、ハイチではギャングによる治安の悪化が国際的に指摘されているが、その背景には貧困があると考えている。雇用を創出するための投資が進めば、治安状況の改善につながると信じている。

ハイチには、他のカリブ海諸国と同様に、美しいビーチリゾートが数多く存在している。今後は、ホテル建設やインフラ整備を進め、観光客の誘致を図りたい。また、インフラ整備に関しては、今後JICAとも連携し、支援の可能性を相談していきたいと考えている。

ハイチはかつてフランスの植民地だったが、ハイチ革命を経て1804年に世界初の黒人共和国として独立を宣言した歴史をもつ国家である。また、クレオール料理、音楽、ダンス、精神文化といったわが国の魅力を日本の皆さまにもぜひ知っていただきたい。そのためにも、私の在任中に「日本・ハイチ親善協会」を設立したいと考えている。

■モーリタニア・イスラム共和国大使

将来性高い金鉱山 投資を

▷７月28日＝アブデラヒ・ケブドゥ駐日モーリタニア・イスラム共和国大使

小方専務理事は、アブデラヒ・ケブドゥ駐日モーリタニア・イスラム共和国大使を訪問した。大使はヌアクショット大学法学部（モーリタニア）を経て、オレルアン大学法学部（フランス）にて法学修士号を取得。グルノーブル政治学院（IEP）にて政治学上級学位（DEA）を取得後、モーリタニア大統領府担当官としてキャリアをスタート、駐米、駐チュニジア、駐スペインの参事官を経て、駐イタリア一等参事官および特命全権大使並びにローマに拠点を置く国連機関の代理代表（食糧農業基金（FAO）、国連食糧計画（WFP）、国際農業基金（IFAD）、駐ニジェール総領事、駐ブラジル大使、駐ベルギー大使（管轄国：デンマーク、フィンランド、アイスランド、ルクセンブルク、ノルウェー、オランダ、スウェーデン、EU、NATO、OPCW））を歴任し、2024年５月大統領選挙に向けた選挙運動中のガズワニ候補の広報担当者を経て25年５月に着任した。

【大使のコメント】

私の外交官人生は28年の間１度も本国で勤務を行わず外地から外地へと渡り歩くという極めて稀有のものだった。昨年はモハメド・ウルド・ガズワニ大統領の選挙活動を手伝うために本国に戻ることができた。今回、駐日大使として日本を訪れることができ嬉しく思う。

私のキャリアの大半は欧米だったため日本との接点はあまりない。ただ、モーリタニアはタコ漁で有名で日本で消費されるタコの１／３が我が国から輸入されている。モーリタニアのタコ漁を我が国の一大産業に育て上げたのは、1970年代に漁業指導でモーリタニアを訪れた中村正明氏という日本人。誰も見向きもしなかったタコの採り方を教え我が国に富をもたらしてくれた。モーリタニアで一番有名な日本語は「タコ」で、一番有名な日本人は「中村正明」だ。

私が高校生の頃、日本について製造業の品質や効率性が非常に高いこと、また勤勉で几帳面な国民性を知り興味をもっていた。実際に日本に来て、朝夕日本人が整然と出退勤する姿を見て驚いた。ほかの国ではなかなか見られない光景だ。

日本とモーリタニアの貿易は、タコ、マグロなどの水産資源、鉄鉱石などが日本に輸出されている。

また、日本からはこれまで多くの経済援助を受けている。

金は鉄鉱石などと並ぶ主要資源でありモーリタニアの金鉱山は非常に高いポテンシャルがある。モーリタニアは、サハラ砂漠と大西洋に面した西アフリカの国で、独特の自然と歴史的遺産に恵まれた観光資源を持っている。特にモーリタニアの内陸部には広大な砂丘が広がり一見の価値がある。大西洋沿岸に位置する自然遺産、バン・ダルガン国立公園やシンゲッティ、ウアダン、ティシット、ウアラタといった世界遺産にも登録されているイスラム建築と砂漠文化が融合した古代都市群など是非訪れてほしいところが多い。日本からモーリタニアへの直行便はなく、イスタンブール経由で行くのが一般的だ。

私の駐日大使として一番のミッションはモーリタニアと日本の更なる関係強化であり、ビジネス面では我が国への投資を誘致したい。また、民間外交推進協会や日本モーリタニア友好協会の力も借りて我が国のことを日本の人々にもっと知ってもらうための活動もしていきたい。

Celebration

【７月１日】
デンマーク・ＥＵ議長国グランドレセプションにてヤール・フリース＝マスン駐日大使（左）と松澤建FEC理事長

100年の歴史を紡ぐカクテル

1924年に誕生した帝国ホテル初のオリジナルカクテル「マウント フジ」をご堪能ください。

帝国ホテル

FEC 活動日誌

今後の催しのご案内

◆９月４日（木）　14時～16時
第294回国際研究会
講　師：清家篤日本赤十字社社長
テーマ：生涯現役社会に向けて：健康寿命の延伸で高齢者の社会参加を促進する
会　場：明治記念館

◆９月18日（木）　14時～16時
第295回国際研究会
講　師：小原凡司（公財）笹川平和財団上席フェロー
テーマ：台湾有事シナリオと日本の安全保障（仮）
会　場：オンライン

◆９月29日（月）　18時～20時
第296回国際研究会
講　師：苫米地英人コグニティブリサーチラボ㈱代表取締役CEO
テーマ：AI、認知領域戦と我が国の安全保障
会　場：如水会館

◆10月９日（木）　11時30分～13時30分
第297回国際研究会
内　容：ニュージーランド・フォーラム
会　場：都内ニュージーランドレストラン

協会だより

【新個人会員】
▷仙波伶菜
▷山根れいか

詳細、最新情報は本協会ホームページ（https://www.fec-ais.com）をご覧いただくか、事務局（電話03-3433-1122）にお問い合わせ下さい。いずれも定員に達し次第締め切りとさせて頂きますので予めご了承下さい。

FEC News　月１回発行、定価１年2,000円（送料・年間購読料/購読料は年会費に含む）TEL 03-3433-1122（代表）FAX 03-3433-1123　E-Mail tokyo@fec-ais.com

発行所：民間外交推進協会　事務局：〒105-0001 東京都港区虎ノ門３-７-８ ランディック第二虎ノ門ビル３階　発行責任者：松澤建（理事長）　編集者：小方俊也、古谷野純子